

## 【エッセイ】

### 知識探訪——多民族社会マレーシアの横顔を読む

マレーシアは、世界のさまざまなものを内に取り入れ、新しいアイデアを常に世界に向けて発信している社会です。

植民地化やそれ以前の経験から民族混成社会として形成されたマレーシアは、世界遺産として認められるほどの民族的多彩さを持つとともに、イスラム経済の分野で世界を先導しようとする積極性も備えています。国内では、ブミプトラ政策によって安定と成長をはかる一方で、教育を通じて人材育成の努力を重ねてきました。多数派であるマレー人はイスラム教を日々の暮らしの参照点としていますが、主要三民族のほかに多彩な民族世界があり、また、近隣諸国出身の外国人も成長と多様化をもたらす存在としてマレーシア社会に欠かせない存在です。このように多種多様な人々が集まるマレーシアでは、いろいろなメディアを利用して意見の調整がはかられてきました。

「知識探訪——多民族社会マレーシアの横顔を読む」では、マレーシアの日常生活で見られるものごとを切り口に、多民族社会マレーシアの横顔を紹介します。

#### ■歴史と社会——混成社会のかたちと成り立ち

民族間関係を変えうる？ ツーチャー基金会の慈善活動（篠崎香織）

#### ■イスラム経済——イスラムで世界の先導をめざすマレーシア

イスラムと母乳（福島康博）

#### ■イスラムと宗教——日々の暮らしを支える参照点

シンガポールのマレー・ムスリムの過去と現在（坪井祐司）

アラブ地域における東南アジアからの留学生（山口元樹）

インディラ・ガンディー係争一子の改宗問題に歴史的判決（光成歩）

#### ■文化とメディア——民族混成社会に公共圏を作る

「サテ・カジャン」考～ローカル・フードの文化遺産化？（左右田直規）

マッサージとお産婆さんの系統（クトゥルナン）（井口由布）

国際ペンクラブとマレーシア華人作家（舩谷鋭）

巨星墜つ。あるボルネオ作家の死（舩谷鋭）

#### ■近隣諸国——近しき仲にも垣を結え

ルックイーストとインドネシアの関わり（野中葉）

#### ■日本との関係

産学連携で実施する「日本語人」研修の可能性（木村かおり）

高岳親王とマレーシア（信田敏宏）

このコラムは、JAMSの協力による『The Daily NNA マレーシア版』の月刊コラム「知識探訪—多民族社会の横顔を読む」（2017年3月～2018年2月掲載分）を再掲したものです。再掲にあたり表現を一部変更し、写真や図表は割愛しました。執筆者の所属先は原稿発表時のものです（原稿発表日は本文の末尾参照）。過去の記事はJAMSウェブサイトでご覧いただけます。

## 民族間関係を変えうる？ ツーチー基金会の慈善活動

篠崎香織

クアラルンプール (KL) 市内のジャランクチンからジャランクボンに降り、約 2.7 キロ進むと、左側に灰色の石造りの壮麗な建物が見えて来る。この建物は、台湾を本部とする仏教団体、台湾仏教慈濟基金会マレーシア (Taiwan Buddhist Tzu Chi Foundation Malaysia、ツーチー基金会) のスランゴール・KL 支部である。ツーチー基金会は台湾で 1966 年に設立され、現在では 50 カ国に支部を持つ。マレーシアでは、93 年に最初の連絡所がペナンに設置され、それ以降、マレーシア半島部、サバ、サラワク両州に拠点を設置し、活動を全国に広げていった。マレーシア・ツーチー基金会に参加しているのは、主に華人である。同基金会の活動は、主に華人系マレーシア人の参加者からの寄付によって支えられている。

ツーチー基金会は、仏教を信仰する活動を行うとともに、社会奉仕活動を積極的に行ってきた。人道主義に基づき、政治や文化、信仰の違いを超えて社会奉仕を行うことをモットーに、寄付活動、医療サービスの提供、教育支援、文化活動などを展開してきた。91 年より国際的な災害支援活動を積極的に展開しており、世界各地の被災地にボランティアを派遣している。

マレーシア・ツーチー基金会も、これらの社会奉仕活動を積極的に展開している。マレーシアでは甚大な自然災害はそれほど多くはないものの、頻繁に洪水が発生しており、それら被災地にマレーシア・ツーチー基金会のボランティアが赴き、救援活動や支援物資の提供を行ったり、がれきや泥の撤去作業や清掃活動を行ったりしている。被災地には、マレー系居住者が多い地域も含まれる。また貧窮者や病人、高齢者を対象とした寄付活動や医療

サービスの提供においても、学生を対象とした奨学金事業においても、マレーシア・ツーチー基金会は人道主義の精神のもと、民族や信仰を問わずに救いの手を差し伸べてきた。受益者にはマレーシア国内の様々な民族が含まれ、マレーシアに滞在する外国人も含まれる。

半島部では、貧窮者や病人、高齢者の救済や、奨学金の提供といった相互扶助は、基本的に民族の枠内で行われてきた。民族や信仰を問わず慈善活動を行う NGO 組織などももちろん存在するが、ツーチー基金会のように宗教を基盤とする組織による慈善事業は、宗教を同じくする人たちを対象とするのが一般的であった。半島部では宗教と民族が概ね対応しており、イスラム教はマレー人を扶助する枠組みであり、仏教は華人を扶助する枠組みであり、宗教と民族の組み合わせがこれ以外のパターンを取ることはあまりない。

このことを踏まえると、仏教系の組織であり、華人の寄付によって活動が支えられているマレーシア・ツーチー基金会の活動は、これまでの半島部における了解を超えるような活動であると言える。そうした活動が、提供する側からも、また提供される側からも受け入れられているのは、戦争や自然災害の被災者が世界のどこかで現れた時に、民族や宗教を越えて世界各地から支援の手が差し伸べられるようになった今日の世界のあり方と連動しているのかもしれない。マレーシア・ツーチー基金会の活動が、半島部の民族間関係を変える一つのきっかけになるかどうか、注目される。[2018.1.23]

(しのぎき・かおり 北九州市立大学)

## イスラームと母乳

福島康博

ハラール（イスラームの戒律で許されたもの）・ビジネス先進国とみなされているマレーシア。しかしながら、イスラームの教義に基づいたハラール認証は、ムスリム（イスラーム教徒）ではない者にとってはもちろん、ムスリムであっても一般的なイスラーム理解よりも専門的な内容を含んでいる。そのため、この国でもたびたびトラブルが発生する。

報道によると、2017年8月にマラッカの高級ホテルに宿泊した華人女性が、母乳をレストランの冷蔵庫で凍らせるよう依頼したところ、スタッフから「母乳はノン・ハラール」という理由で拒否された。後日、彼女が交流サイト（SNS）で情報を拡散したところ、ホテル側がスタッフの理解不足と対応の不適切さを謝罪した。

飲食物のハラール認証基準である MS1500:2009 は、加工された飲食物が対象となる。収穫したての穀物や野菜・果物、汲みだての湧き水、動物・魚類などは、イヌやブタなどイスラームの教義で有害とされる一部のものを除けばハラールであり、認証取得は不要とされる。ただ、これらの加工・調理で人の手が加わる時に、禁じられた物質の接触や混入の可能性が生じるため、ハラール認証が行われる。

母乳については、実は MS1500:2009 に規定がある。najs（ナジュス）と呼ばれる不浄でハラール認証が取得できない物品を規定する 2-4-1-d とその註によれば、「人間や動物の開口部から排出される液体と固体」はナジュスである一方、「イヌ・ブタ以外の動物、および人間の乳・精子・卵子はナジュスではない」と記されている。すなわち、人体から排出される糞尿や血液はハラールではないが、母乳は牛乳やヤギ、ラクダのミルクと同様にハラールとなる。なお、母乳がムスリムのも

のであるか否かの規定はない。もとよりマレーシアのハラール認証では、食品産業に従事する者の民族や信仰は、と畜などを除き原則として不問である。

今回のケースに戻ると、華人女性は母乳がハラールであると正しく理解していた一方、ホテルの従業員は、母乳はノン・ハラールであり、ハラール食品用の冷蔵庫での保管は禁じられると思い込んでいたようだ。ホテル側によれば、今後は従業員に対して適切な従業員教育を行うとしているが、MS1500:2009 の 3-1-2 は、ハラール認証を取得した企業や事業所は、従業員に対してハラールに関する教育を行うことが義務づけている。

母乳については、イスラームの教義に興味深い規定がある。乳兄弟・姉妹という考え方で、クルアーンの第4章 23 節によれば、同じ乳母に育てられた（同じ母乳を飲んで育った）男女は血縁者と同等とみなされ、結婚が禁じられる（他方、相続権は発生しない）。そこでこの規定を悪用し、恋愛関係にある男女に横恋慕した者が2人に気付かれぬよう食事に母乳を混ぜ、後でからくりを明らかにすることで結婚を邪魔したり、女性による単身の海外旅行が禁じられている国では、女性旅行者と男性ツアー・コンダクターが同じ母乳を飲むことで乳兄弟・姉妹となって海外旅行を行う、といった事案が発生することがある。

このように、イスラームにおける母乳は、子育てにとどまらず家族関係や社会のあり方を規定する存在である。あるいは、母乳を通じて個人と家族、社会が繋がっているといえよう。[2017.9.13]

（ふくしま・やすひろ 東京外国語大学）

## シンガポールのマレー・ムスリムの過去と現在

坪井祐司

シンガポールのスルタン・モスクの近くにマレー・ヘリテージ・センター (MHC) という施設がある。かつてのマレー王族の邸宅が改装され、2005年に現在の形となった。シンガポールのマレー人に関する資料館であり、文化活動の中心にもなっている。

多民族社会のシンガポール政府は、特定の民族を越えたシンガポール人というアイデンティティーを大切にしてきた。同時に、国家遺産局のもとでは華人、マレー人、インド人といった各民族の文化振興を担う拠点も築かれており、MHCもその一つである。

このMHCにおいて、「発信者の創造：1920～60年代のマレー近代性の印影 (Mereka Utusan: Imprinting Malay Modernity 1920s-1960s)」という企画展示が開かれている (2017年6月25日まで)。これは、20世紀半ばのシンガポールにおけるマレー語の出版業の特集である。展示にあわせて、活版印刷の体験、学芸員によるガイドツアー、子供向けのワークショップなど、様々な関連企画も用意されている。

この時代のマレー語出版物の多くはジャウィと呼ばれるアラビア文字により表記されていた。アラビア文字はイスラム教とともにマレー人に受容された。しかし、マレー半島を植民地化したイギリスはマレー語のローマ字 (ラテン文字) 表記を定め、行政や教育に導入した。これが現在のマレー語のローマ字表記の起源である。ただし、ジャウィからローマ字への転換には時間がかかり、20世紀前半にはローマ字とジャウィが併存していた。1920、30年代にはマレー人の政治的主張が高まってジャウィの新聞・雑誌の発行が盛んになり、戦後になると多色刷りの普及により写真を多用した娯楽色の強い大衆雑誌も現れた。

その後ローマ字にとってかわられ、忘れ去られた状態となったジャウィだが、近年は関心が復活しだしている。世界的なイスラムの

強まりのなかでムスリムの文字として、多民族社会におけるマレー人の文化として、ジャウィが見直されているのである。シンガポールでは、1965年の (マレーシアからの分離) 独立以降、一貫して英語を重視した国づくりが行われ、マレー語の出版業は衰退した。この企画展示からは、マレー・ムスリムの伝統としてのジャウィの出版文化を見直そうという意気が伝わってくる。

加えて、展示は科学技術や商業化といった要素に着目した。ポスターには女性とロケットのイラストがデザインされている。マレー・イスラム文化は、植民地がもたらした西洋起源の「近代性」をとりこんだ。大量で安価な新聞の発行には印刷技術が、読み手の増加には教育の普及による識字率の向上が不可欠であった。ジャウィは王族や宗教家の手を離れてジャーナリズムの媒体となり、都市の消費社会のなかで大衆化した。ムスリムによる政治的主張とカラフルな女優の写真や電化製品の広告がマレー語を通じて結びついたのがこの時代であった。大英帝国の拠点だったシンガポールがマレー語出版活動の中心でもあったことは偶然ではない。

宗教と科学技術や商業化というテーマは「現代性」も持っている。ムスリムが外部から先端技術を取り込む過程は、インターネットを通じてイスラム運動がつながり、ファッションや金融などの分野でもイスラム化が進む現在の状況とも重なる。宗教とは政治や科学などすべてを包み込むものであり、古い伝統ではなく常に最新の状態にアップデートされ続ける。IT先進国のシンガポールのマレー・ムスリムがかつてのマレー語の言論の場の近代性に注目したことは、この地域の宗教のあり方を示しているともいえよう。 [2017.3.28]

(つばい・ゆうじ 東京外国語大学)

## アラブ地域における東南アジアからの留学生

山口元樹

今年の2月末、エジプトに留学中のマレーシア人126名が有効な学生ビザを所持していないという理由で当局に拘束されるという出来事があった。結局、そのうちの104名が国外退去処分を受けマレーシアに送還された。この出来事の原因は、学生が所属していた教育機関が必要な手続きを怠っていたことにあるらしい。エジプトに留学しているマレーシア人は、近年様々な困難に直面している。ここ数年のエジプトは政情不安が続いている上、近年のリンギ安は留学生の生活を苦しめている。しかし、このような状況にありながらも、1万1,000名ものマレーシア人が現在エジプトで学んでいる。

マレーシアをはじめ東南アジアのイスラーム教徒は、昔からイスラーム世界の中心であるアラブ地域に強い憧れを持ってきた。マレーシアやインドネシアなどの出身者は、歴史的にはアラビア語で、インドネシアのジャワ島に由来する「ジャワ」や「ジャウィー」と一括して呼ばれてきた。近代より以前に、地理的に遠く離れたアラブ地域に行くことができた東南アジア出身者はごく少数に限られていたが、交通機関の発達によって状況は変化していった。19世紀後半にインド洋の海上交通で蒸気船の利用が拡大して以来、東南アジアからアラブ地域への人の流れは大きく増加した。

ただし、19世紀末までは、東南アジアのイスラーム教徒にとってのアラブ地域における学問の中心地は、エジプトではなくイスラームの最大の聖地メッカであった。学問を志してメッカに渡った東南アジアのイスラーム教徒の中には、数カ月から長い場合には10年以上滞在する者もいた。そのような長期滞在中からは、学識を認められアラブ地域で広く名声を博するイスラーム学者もあらわれた。また、20世紀前半のマレーシアやイン

ドネシアにおけるイスラーム運動で活躍する多くの人物もメッカで学んだ。

エジプトに留学する東南アジア出身者の数が増え始めるのは、20世紀に入ってからのことであり、1920年代になってその数は100名以上になった。留学生たちは、自分たちの相互扶助団体を結成したり、マレー語の雑誌を発行したりした。エジプトが東南アジアから学生を引き付けるようになった一つの理由として、メッカと比べて宗教的な学問とともに近代的な学問を学ぶのに適していたことが挙げられる。当時のエジプトの首都カイロには、スンナ派イスラームの学問の中心であるアズハル大学に加えて、ダール・アル＝ウルム（教員養成学校）やエジプト大学（現在のカイロ大学の前身）といった近代的な教育機関が設立されていた。また、エジプトは、著名なイスラームの思想家ムハンマド・アブドゥーやその弟子のラシード・リダーが主導したイスラーム改革主義運動の中心地でもあった。東南アジアのイスラーム教徒は、イスラーム世界の中心における新しい運動に強い関心を示した。

東南アジアから留学生は、アラブ地域のイスラーム運動の影響を自分たちの出身地に伝える仲介者としての役割を果たしてきたと言える。アラブ地域に留学すると言うと、現在ではイスラームの過激思想に染まるというイメージを持つ人もいるかもしれない。しかし、アラブ地域におけるイスラーム思想も一様なものではなく、東南アジアからの留学生は様々な潮流に触れている。今後も、エジプトやメッカで学んだ留学生たちは、東南アジアのイスラームの発展に大きな役割を果たしていくであろう。[2017.5.30]

(やまぐち・もとき 東洋文庫研究員)

## インディラ・ガンディー係争一子の改宗問題に重要判決

光成歩

一方当事者による改宗 (unilateral conversion) という言葉が数年来、マレーシアの新聞を賑わせている。一方当事者による改宗とは、夫婦関係の破綻の末、子の親権を求める父親が自身とともに未成年の子を母親 (妻) の了承なくイスラム教に改宗させる事案を指す。父親が改宗を既成事実としてシャリア裁判所で親権を確保しようとするのに対し、非ムスリムの母親は一般裁判所に子の改宗の無効を訴えるため、どちらの裁判所が改宗の有効性を判断するかという管轄問題が不可避の争点となってきた。シャマラ、スバシニ、そしてディーパ、そしてインディラ・ガンディーは、いずれも (元) 夫による子の一方的な改宗に抵抗して裁判に訴えた母親たちの名だ。2018年1月29日のインディラ・ガンディー係争への連邦裁判所判決は、このような事案に対し、初めて子の改宗の無効を言い渡したものである。

マレーシアでは、ムスリムと非ムスリムが異なる家族法の下で社会生活を送っている。ムスリムには各州で定められたイスラム家族法条例が、非ムスリムには連邦法である結婚・離婚改革法が適用され、前者を各州のシャリア裁判所が、後者を連邦の一般裁判所が管轄している。イスラム教への改宗手続き規定は各州のイスラム関連条例にあるが、非ムスリム夫婦の一方が結婚継続中にイスラム教に改宗した場合、婚姻解消や財産分与、そして子の親権といった事柄を処理する包括的な規定はいずれの家族法も定めていない。

この問題を先鋭化させてきたのが、シャリア裁判所と一般裁判所の管轄問題である。マレーシア連邦憲法第121条第1A項は、マレーシアの一般裁判所がシャリア裁判所の管轄事項に管轄を及ぼさないと定めている。そして、2000年前後から、一般裁判所は改宗事案においてこの憲法条項を理由に改宗の有効性の判断を避けてきた。この一例が、2007年12月に下されたスバシニ係争の連邦裁判所判決

である。判決は、結婚・離婚改革法の下で登録された結婚について、たとえ一方の配偶者がイスラム教に改宗しても婚姻解消や子の親権の認定はシャリア裁判所ではなく一般裁判所が行うものとした。一方で、未成年者の宗教の決定について定めた憲法第12条第4項の「親 parent」の語は単身の親を意味するもので父親単独での子の改宗は禁じられていないとし、改宗の有効性についてそれ以上の判断を避けた。この結果、スバシニや類似の係争を抱えた母親らは、子の親権を認められながらも、一方的に行われた子の改宗を既成事実として受け入れるよう迫られてきた。

インディラ・ガンディー係争の判決は、こうした状況に風穴を開けるものだった。判決は判事5人の全員一致で、一般裁判所の司法審査権が改宗の適法性の判断に及ぶとした。そして、改宗登録の手続きが (改宗が行われた) ペラ州のイスラム教施行条例に反していたこと、また、憲法第12条第4項の「親」は単身の親ではなく両親を意味するとした上で、母親の了承なく行われた改宗が憲法に反していたことを認定した。この結果、インディラ・ガンディーの3人の子の改宗は法的に無効と宣言されたのである。

連邦裁判所の判決は先例として下位の裁判所を拘束する。一方当事者による子の改宗事案の扱いは大きく変わるだろう。判決を受けて政府は、2017年に頓挫していた一方当事者による子の改宗を防ぐ法改正の再検討を発表した。また、判決は、シャリア裁判所と一般裁判所の管轄問題一般に対する先例となる。管轄問題に関する連邦裁判所の判断は揺れており、今後の判決の積み重ねが注目される。なお、法務長官室は管轄問題の解決を掲げて新部署を設置するとしており、法廷外の動向も議論に影響するだろう。[2018.2.27]

(みつなり・あゆみ 京都大学東南アジア地域研究研究所)

## 「サテ・カジャン」考〜ローカル・フードの文化遺産化？

左右田直規

マレーシアの首都クアラルンプールから20キロメートルほど南東に位置するカジャン。スランゴール州南東部の主要都市として発展を続けている。MRT（大量高速交通システム）1号線の開通による開発の加速化も予想される。

古くからこの町の名を世に知らしめてきたのが、串焼きの「サテ」である。陽が傾いてからカジャンの中心街を歩いていると、あちらこちらの店先でもうもうと立ち上る煙が目に入る。タレに漬け込んだ鶏肉や牛肉などの串刺しを炭火焼きしているサテの屋台である。「サテ・カジャン」はマレーシアのサテの代名詞となってきた。

サテはインドネシアやマレーシアなど東南アジア島嶼部の各地で広く食されてきた。その起源はよくわからないが、オランダ植民地時代の19世紀はじめにジャワ島でアラブ系かインド系のムスリム（イスラーム教徒）移民が伝えた串焼きが始まりだともいう。

では、なぜカジャンがサテで有名になったのか。サテ・カジャンの祖として真っ先に名がるのがタスミン・サキバンなる人物である。タスミンは1914年にジャワ島中部のプカロンガンからカジャンに移り住み、1917年にサテ売りをはじめた。タスミンより3年早くカジャンに移住していた弟のロノ・サキバンも、兄タスミンの仕事を手伝っていたが、後にサテ売りとして独立した。大ぶりの肉片と濃厚で甘めのピーナツ・ソースを特徴とする彼らのサテは人気を博し、サテ・カジャンの発展の礎を築いたとされる。

ジャワ出身のこの兄弟の物語は、ジャワ島がサテ発祥の地だという通説と符合する。また、当時のスランゴールにジャワ人など半島外出身の「マレー系」移民が多数流入していたことをも思い起こさせる。

現在のカジャンのサテ業者の中で事業の拡

大に最も成功したのは、「サテ・カジャン・ハジ・サムリ」（Sate Kajang Hj. Samuri、以下SKHS）だろう。現在、首都圏を中心に20ほどの店舗を持つSKHSの創業者サムリ・ジュライミは、サテ・カジャンの祖タスミンの妻の甥である。少年時代からタスミンのサテ屋台を手伝っていたサムリは、1992年に自らの名を冠したSKHSを開いた。その後、他の同業者に先んじて事業の組織化とチェーン展開に取り組み、成功したマレー系起業家の1人とみなされるようになった。2008年にはスランゴール州のスルタン（州王）から「ダト」の称号を授与されている。

ロゴマークに「本物のサテ・カジャンの味のために」という標語が添えられているように、SKHSはサテ・カジャンの伝統の継承者を標榜している。タスミンの下で経験を積んだサムリの発言からは、サテ・カジャンの本流を受け継いでいるとの自負がうかがえる。サムリ以外にも、ロノの孫など、サテ・カジャンの遺産の後継者を自認する同業者は少なくない。

このように、サテ・カジャンをめぐる、ローカル・フードの文化遺産化が起こっているようにも見える（注1）。2009年にカジャンのサテの歴史と現在を展示した「カジャン・サテ・ギャラリー」が開館したことは、食文化の遺産化の象徴といえるだろう。1917年にカジャンのサテが発祥したという説に従えば、今年がサテ・カジャン誕生100周年にあたる。カジャンが誇る食文化の来し方行く末に注目したい。

（注1）この現象は櫻田涼子氏が本誌2015年9月29日号で紹介した「コピティアム」の喫茶文化の事例と似た部分がある。[2017.6.28]

（そうだ・なおき 東京外国語大学）

## マッサージとお産婆さんの系統 (クトゥルナン)

井口由布

読者の中には、マレーシアのリゾートホテルでマレーの伝統的なマッサージなどというものを体験したことのある方もあるだろう。私はこれらの伝統的なマッサージというものを、基本的には観光産業による捏造か伝統の創造なのだろうと思ってきた。確かに多くの場合はそうなのだろうが、まったくの捏造かというところもそうでもないのではないか。ここ数年行っているお産婆さんへの聞き取り調査の中で、これまで見えなかったことが見えてきた。

私の最近の研究テーマはマレーシアにおける女性の身体とセクシュアリティに関することで、その一環としてお産婆さんへの聞き取りを行うこととなった。日本語では、ジェンダーの問題なども踏まえて助産師という用語を使うが、マレー語でいう「bidan」は訳語のニュアンスとしては「産婆」なのではないかと考え、ここでは産婆という言葉を使いたいと思う。

お産婆さんたちの仕事は、出産の介助だけでなく、トゥンク (tungkū)、出産後のマッサージ、出産 45 日後の清めの儀式、赤ん坊の髪を切る儀式 (cukur rambut)、スナット (女子割礼) などである。お産婆さんの仕事の大きな中心は、今では出産した女性へのマッサージである。「産婆」といえば出産の介助が最も中心的な仕事ではないかと考えられるが、マレーシアの農村でも自宅での出産は少なくなってきた。だが、産後の女性へのマッサージはいまだ大きな需要がある。そこでマッサージだけを行うお産婆さんというものもあるようだ。上に記した「トゥンク」もマッサージの一つである。トゥンクは鉄製の道具で、これを温めてヤエヤマアオキ (mengkudu) の葉、もしくはマレーのハーブであるウラムを敷いた布でくるみ、マッサージしたいところをこれで押す。ペナンでの聞き取りでは、出産後に子宮を小さくする効果があるという。

私がインタビューをしたのは、マレー半島北部のペナン州やクダ州で活動するお産婆さんたち 10 名である。病院などで正式な訓練を受けたお産婆さんは 1 人だけで、残りは全てお産婆さんだった母や祖母からその技術を受け継いだと言っていた。彼女たちはよくお産婆さんの系統 (keturunan) があるという言い方をしていた。その意味では、お産婆さんたちの世界は縦のつながりが強力なのである。

お産婆さんたちには横のつながりはほとんどなく、隣の村のお産婆さんぐらゐまでなら知っているが、それ以上はわからないようだ。政府による登録制度や協会などもなく、調査でインタビュー相手を探すのはなかなか大変だった。私がインタビューをしたお産婆さんたちの年齢は 63~83 歳と高齢であった。母や祖母から技術を受け継いだ彼女たちは、次の世代へ自分の技術を継承しようという意志はあるが、自分の娘や孫たちは興味をもっていないと言っていた。お産婆さんたちの縦のつながりも時代とともに失われていくのだろう。

そんなふう思いながらカンボンでの調査を終えて町へ戻り、帰国前にペナン島のちょっとしたホテルへ行き、スパでのマッサージを予約した。マッサージをしてくれた若い女性の施術者に、私はカンボンでお産婆さんにインタビューをしたことをなんの気なく話した。するとその女性が「彼女は私のおばあさんだ」と言うのだ。もう一人のマッサージ師の女性も自分の祖母も母も村ではお産婆さんをやっているという。20 代の彼女らは村で伝統的な産婆をするという道は選ばなかったが、町のホテルでマッサージ師をしている。どうやらお産婆さんの系統というものは今でも続いているらしい。さて、私が受けたマッサージはマレーの伝統と関係があるのか不明ではあったが、とても気持ちのよいものだった。[2017. 6.28]

(いぐち・ゆふ 立命館アジア太平洋大学)

## 国際ペンクラブとマレーシア華人作家

舩谷鋭

世界文学の潮流の中で、ラテンアメリカなどのポストコロニアル文学、国際移民状況を映したディアスポラ文学に比べ、マレーシア発と言ってもよい、Sinophone (華語語系)文学は、「台湾熱帯文学シリーズ」(人文書院)がそれに当たるが、日本であまり知られていない。旧イギリス植民地のコモンウェルス文学など英語文学の華語版だが、中国大陸で忌避されるのは「中華」でなく「離散」だからだろうか。

マレーシアからの台湾留学生らによる華語文学は、従来のアマチュア同人文学の域を超えた評価を受けるが、「台湾熱帯文学」に含まれない作家の一人にシルビア・シェン(ケン=しめすへんによんがしらに羽=素菜、シェン・スクライ)がいる。多文化環境で育った女性作家はマラヤ大学を卒業後、日本、ドイツへの留学を皮切りに、北大西洋条約機構(NATO)平和維持部隊で従軍通訳を経験し、現在は米国に在住。馬華文学最大の隔年イベント「星洲日報」の「花蹤文学賞」でしばしば名前が挙がる。平和維持部隊への従軍エッセイはマレーシアの書店でも華語部門のベストセラーだった。

シェンは渡米まで国際ペンクラブ傘下の独立中文ペンクラブに所属し、マレー人と華人の民族摩擦を描いた。2001年設立の独立中文ペンクラブは、ノーベル平和賞受賞前の劉曉波(1955-2017)が会長を務めたこともあるアメリカの非営利組織(NPO)で、世界人権宣言60周年に起草された「零八憲章」にも含まれる言論と出版の自由、および華語文学の顕彰に努めた。

とはいえ、劉自身は六四天安門事件当時はコロンビア大学の客員研究者でありながら、大方の民主派中国人知識人と逆に帰国を選択

し、事件後に投獄、釈放されたのちも出国しなかった。中国ではほとんど知られない劉の国内中国人として初のノーベル平和賞受賞だが、世界で活動する中国の民主化運動家、チベット人やウイグル人活動家らがオスロに集結、連帯した「オスロの誓い」のきっかけとなった。

日本では国際連盟脱退後に島崎藤村を初代会長に日本ペンクラブが発足し、2012年には日本華文文学ペンクラブも設立されたが、東南アジアでは「S.E.A. Write Award」を主宰するタイ国ペンクラブに国際ペンクラブセンターがあり、ミャンマーペンクラブのマ・ディダが国際ペン理事に名を連ねる。

シェンは独立中文ペンクラブからアメリカペンクラブへ鞍替えしたが、ボルネオの熱帯雨林の先住民を描いた「秘密の花園」の中で、自分と同じマレーシアの非主流民族(とはいえ主流グループ、ブミプトラ=マレー系と先住民の一角)であるプナン族について、環境保護活動家ブルーノ・マンサーとの関わりに触れた後、森林伐採による環境破壊の文脈でこう締めくくっている。

<あなたが一本一本手で植物を移し替えているのと時を同じくして、私は筆を執り、一語一語であなたが熱帯雨林を保護するのを助けよう。>

マレー半島生まれのシェンにとって、東マレーシアはあたかも本土から見た沖縄のような場所だ。「異郷」への帰国が国内民族問題から国際環境問題への変心を促したようだ。  
[2017.9.5]

(ますたに・さとし 立教大学)

## 巨星墜つ。あるボルネオ作家の死

舩谷鋭

「李永平が死んだ」と言って、どのくらいの日本人、あるいはマレーシア人が反応するだろう。ラテンアメリカなどのポストコロニアル文学、国際移民状況を映したディアスポラ文学など世界文学の潮流の中で、マレーシア発と言って良い Sinophone (華語語系) は、「台湾熱帯文学シリーズ」(人文書院)として和訳されているが、劈頭を飾るのは李永平の『吉陵鎮ものがたり』だった。マレーシア出身で台湾在住の Sinophone 作家は小説に限らず、映画監督の蔡明亮もその一人だが、故郷ボルネオの原風景は彼らの創作の尽きせぬ源泉と言えよう。

—— その頃我が家は、南洋のボルネオという島に住み、イギリス植民地下で「サラワク」と呼ばれている場所で、8人兄弟は首都クチンの学校に上がりました。——『雨雪しとしと—ボルネオ幼年記—』より

1999年に『亜洲週刊』が発表した「中国語小説100選」は未だによく引かれるブックリストだが、トップ3の魯迅、沈從文、老舎といった著名作家に比べ、40位の李永平の名は異彩を放つ。英領時代のボルネオ・クチン(現マレーシア・サラワク州)で47年に生まれた「南洋からの流れ者」は、20才で華僑留学生として台湾大学に入学してモダニズムの洗礼を受け、米国で研究者となり、台湾で教職を得る。李は後年インタビューの中で、「マレーシアは嫌いだ。大英帝国がマレー半島の政治屋と勝手に拵えた国で、とりあえずインドネシアに対抗したいがため、高校生頃、わけがわからないうちに英国からマレーシア国民にされたが、全く受入れられず、怒りが募るばかりだった」と述べている。

もう一人、ボルネオ出身の台湾在住作家に張貴興がいるが、2人のボルネオ台湾作家の比較は、『吉陵鎮ものがたり』の訳者の一人である及川茜によって試みられている。2人

のマジックリアリストたちは、共に故郷ボルネオを、あたかも彼らの創作言語の文化的中心である中国にあるかもしれない、想像上の郷鎮として描く。

『雨雪しとしと』(2002年)は台北の浅草、猥雑極まりない華西街が舞台だ。冒頭の献辞に「ボルネオの幼年時代の思い出を、台北の少女に伝える」とあるように、前作『海東青』(1992年)と同じ7才の少女・朱鴿を聞き手に、主人公「李永平」がボルネオでの幼年時代を、華人にとって帰郷先とも言える中華世界と対照的に語る10編の物語からなる連作中編である。初恋、愛犬、妹など一見日常的なテーマが相互に絡み合う。7番目の物語「遊撃隊員の死」は、英領マラヤの反植民地左翼運動が題材だが、マレー半島だけでなくボルネオにとっても、日本植民地時代の苦難に続く突出した記憶の緯糸は、反共政策と悲惨な日常であることは、近年陸続と発表される華人文学の緒作からも明白だ。

そしてここで、故郷ボルネオについての李の嫌悪感を思い出してみよう。何とも弱く、翻弄され続けた土地であることか。歴史を遡っても、ブルネイ王国、白人王ブルック、日本植民地が繻かれるばかりで、ボルネオ現地の意味は感じられない。まるで中国と英国に翻弄された香港や、日本と中国、米国に弄ばれた沖縄のように。第二次大戦後生まれの李にとって、血の記憶は肅正と結びついている。それは『吉陵鎮ものがたり』、『海東青』、『雨雪しとしと』、『大河尽頭』の後、『朱鴿ものがたり』(2015年)へと続く李山脈で繰り返されるモチーフでもあり、一刻も早い和訳出版が待たれる。2017年9月に享年70で逝去したマレーシア華人文学の巨星を、今に至るマレーシアの歴史と多文化に関心を持つ日本人として悼みたい。[2017.10.31]

(ますたに・さとし 立教大学)

## ルックイーストとインドネシアの関わり

野中葉

先ごろ、皇太子さまがマレーシアとの外交関係樹立60周年を機に、同国を訪問したニュースが各マスコミによって報じられた。日本とマレーシアの友好関係の象徴として多くの人に知られているのは、1980年代初頭に始まった「ルックイースト（東方政策）」であろう。日本などを手本に工業化と経済成長を達成したこの政策は、マレーシアの専門家でなくとも、少なからず耳にしたことがある。

筆者は、現代インドネシアのムスリム社会に関心を持つ研究者である。マレーシアについては門外漢であるが、先日、1960年代～70年代のインドネシアの学生イスラーム運動に関する資料を調査していた際、マレーシアの工業化に関わる興味深い内容を発見した。80年代以降のルックイーストの実施と、その後の工業化をもたらす要因の一つが、70年代初頭のインドネシアとマレーシアの接触の中に見られる、という仮説のもと、その接触の様子を記述してみたい。

ルックイーストでは、多くのマレー系学生が日本に留学し、理系を学び、また多くのマレー系技術者や労働者が、日本の製造業の現場に派遣され、日本の工業技術を学んだことが知られている。帰国後の彼らがマレーシアの工業化の主要な担い手となった。しかし、インドネシア側の資料によれば、それより10年ほど前の1971年、インドネシアのバンドン工科大学を訪れたマレーシアの高等教育長官は「我が国のマレー人は、西欧に関する事柄はイスラームに反するという意識があり、西欧で発展したテクノロジーを学びたがらない。だから今でも、テクニカル・カレッジ（現マレーシア工科大学）の学生のほとんどが華人系かインド系で、マレー人はとても少ない」と語っている。

高等教育長官の訪問の目的は、マレーシアの大学教育拡充を支援するため、インドネシアから派遣できる大学教員をリクルートすることだった。当時、マレーシアは、マレー系優遇を柱とする「新経済政策（NEP）」をスタートしたところだった。この政策の下、マレー系に対する高等教育の就学機会の拡充、マレー語での授業拡大を目指していたものの、それまで英語による教育が一般的だった高等教育機関において、マレー語を使い、特に理系の分野を教えることのできる人材は圧倒的に不足していた。当時のラザク首相の意向により、多くのムスリムが教鞭をとるインドネ

シアに対し、教員派遣の要請が行われたのである。

白羽の矢が当たった1人が、電気工学を教えながら、バンドン工科大学のサルマン・モスクにおけるイスラーム活動の指導的役割を果たしていたイマドゥディン・アブドゥラヒムだった。サルマン・モスクは、同大学に通うムスリム学生たちの働きかけにより建設された大学モスクであり、70年代初頭のモスク完成以前から、モスク建設運動と共に活発なイスラーム活動が行われていた。イマドゥディンは、この運動のリーダーの一人だった。彼が説教の中で頻りに説いたのは、イスラームと近代科学の相互補完性だった。これは彼の回顧録の中の言葉に表れている。

「私が説教の際に常に強調してきたのは、共に神に由来する学問である科学とイスラームを統合することである。前者は不文の神の慣行（アッラーのスナ）であり、また後者はクルアーンとして文字化されていて、信仰と敬虔さを生じさせるものである。両者をつなぐ思考が必要とされている」。

インドネシアの理系の最高学府であるバンドン工科大学で教鞭をとりながら、イスラームと科学の融合を説くことのできるイマドゥディンは、マレーシアにとって非常に有用な人材だった。1972年に派遣されて約2年間、彼はテクニカル・カレッジや新設のマレーシア国民工科大学で教鞭をとり、また学外のモスクでは若者たちに対し、近代科学やテクノロジーとイスラームの関係性について熱心に説いた。彼に師事した若者の中には、アンワル・イブラヒムら ABIM 創設者たちも含まれている。

テクニカル・カレッジは、イマドゥディンがマレーシアに滞在中の1972年に国民工科大学になり、その後1975年にマレーシア工科大学になった。70年代には、マレー系優遇政策が進展し、就学機会が拡大して、多くのマレー系学生が大学に通うようになった。また80年代には、ルックイースト政策によって多くのマレー系が日本に渡り、技術を習得して、その後のマレーシアの工業化、経済発展に貢献した。同国の工業化や経済発展をもたらしたルックイースト政策につながる萌芽の一端を、70年代初頭のインドネシアとの関わりの中に見てとることができそうである。[2017.4. 25]

（のなか・よう 慶應義塾大学）

## 産学連携で実施する「日本語人」研修の可能性

木村かおり

マレーシアの日系企業と日本語教育界で互いの人材育成及び研修を産学連携で実施する可能性について提案してみたい。育成しようとしている人材とは「日本語人」である。ここで想定している「日本語人」とは、日本語スピーカーの勤労者であり、仕事観を含む日本の社会文化に面識のある人材のことである。こういった人材を産学連携で育成、研修できないかと考えているのである。2016年のマレーシアの日系企業数は1,383社であった。日系企業では、もちろん相当数の日本語スピーカーが活躍している。ところが、JACリクルートメント・マレーシアの大西信彰氏の「日系企業の抱える人事課題」(2015年9月25日)によれば、他の東南アジア諸国と比較してマレーシアでは「日本語スピーカーの採用に苦戦している」とある。苦戦の原因はなんだろうか。日本語スピーカーはいるが「日本語人」が少ないということだろうか。「日本語人」はどこで、どうやって育成すればいいのだろうか。

まず、マレーシアの高等教育機関では、M大学にしか日本語主専攻コースがない。そのM大学では、ビジネス日本語に関する関心も低く、ビジネス日本語が科目として2017年9月によく始まったばかりである。しかし、M大学にビジネス日本語の科目が始まったところで、マレーシアに多くの「日本語人」を育成するという目標には、簡単には達成しないだろう。なぜなら、M大学の日本語主専攻コースの卒業生は毎年10人程度だからである。だから「日本語人」を増やしたいのであれば、他の大学の副専攻や選択科目の日本語クラス、語学学校にいる学生を「日本語人」として育成することを目指す必要がある。実際に、M大学に来る企業からの出前日本語授業へのリクエストには「日本語初心者対象のビジネスマナーや文化」というものが多い。つまり、企業としては少数の高い日本語力を持つ人材より、日本のビ

ジネス文化を理解するより多くの「日本語人」が欲しいようである。ところが、教室にいる教師はビジネスの現場がわからない。教師が知らないことを授業で扱うのは無理がある。

そこで、協働実践研究会クアラ Lumpur (研究会 KL) は、2017年8月「ビジネス日本語コミュニケーションのためのケース学習」というワークショップ(WS)を開催した。研究会 KL は、マレーシアの高等、中等、教師養成、語学学校の日本語教師が学び合う場として2012年に立ち上がった。今回は日本から講師2名を招きWSを実施した。ビジネスの現場でおこった問題をとりあげ、「あなたが顧客、上司、部下のそれぞれの立場ならどうするか」というシミュレーションをしながら議論することで、原因や解決策を複数の視点で考えるというWSである。複数の視点で議論するこの場には、たった1つの正解なるものはない。だからこそ、1つの案件でも異なる顧客、異なる場面に対して対応を変える、解決策を変えていく必要があることへの気づきにつながるのだ。このWSのコンテンツは、今回招聘した講師が日本で留学生対象に授業として行っているもので、日本の外国人スタッフや日本人スタッフが参加する企業研修としても実施されている。

産学連携の人材育成、研修づくりの提案はここからである。このようなWSを今回のような日本語教師だけの研修とするのではなく、マレーシアの日系企業の研修として共同で実施するという提案である。他社の事例ではなく、WS参加企業の事例を匿名で使い議論するという時間をつくることも有意義であろう。同じ場に参加することで、教師側も企業側も新たな学びがあるはずだ。共同で研修を実施したいというマレーシアの企業があれば、ぜひ声をかけていただきたい。[2017.11.28]

(きむら・かおり 早稲田大学大学院)

## 高岳親王とマレーシア

信田敏宏

数年前、とある財団が企画したマレーシア研修ツアーに講師として同行した時のことだった。ツアー客の1人から「日本と縁のある場所に行きたい」という希望が出され、財団関係者が調べたところ、高岳親王（たかおかしんのう）の話が出てきた。かくして一行は、ジョホール州ジョホールバルの日本人墓地にある高岳親王の墓に行くことになったのである。

高岳親王は、平安時代初期の皇族であり、僧侶であった。延暦18年（799年）に、平城天皇の第三皇子として生まれた。平安京を開いた桓武天皇の孫に当たる。その後、出家して真如と名乗り、空海の弟子として修業し、高野山に親王院を開いた。貞観3年（861年）、62歳の時に唐の長安を目指し、日本を出発。3年後の貞観6年（864年）、長安に到着するが、優れた師に会えず、翌年、広州より海路で天竺を目指した。しかしその後、消息を絶ち、マレー半島の南端で亡くなったと伝えられている。一説によれば、虎に襲われ命を落としたとされている。

高岳親王の入唐および航海の様子については、マルキ・ド・サドの小説の訳者として知られる澁澤龍彦の遺作となった『高岳親王航海記』（1987年）に詳しく書かれているので、興味のある方は読んでいただきたい。

戦前の日本では、高岳親王の名は教科書にも出てくるほど、よく知られた存在であったらしい。南方に進出する日本軍にとって、山

田長政と共に、日本の南方進出の象徴として宣伝されたからである。しかし戦後、上記の澁澤作品によって取り上げられるまで、その存在は忘れ去られていた。

さて、ジョホールバルを訪れたツアーの一行は、早速、日本人墓地に向かった。車が行き交う道路沿いに日本人墓地はあった。事前に許可を得ていた私たちは、フェンスに囲まれた墓地の敷地に入り、しばし散策した。草地の中には数十の小さな墓が立ち並んでおり、なかには芝生がレンガ石で区切られただけの墓もあった。その墓地で、ひときわ目を引いたのが、高岳親王の墓だった。ずいぶん前に亡くなった人なので、墓も朽ち果てていて、見つけるのが難しいのではないかと心配していたが、想像していたものとは違って、実に立派な墓が立っていたのである。聞けば、近年になって、高野山の親王院が新たに建立したのだという。

高岳親王がマレーシアで亡くなったという話は「伝説」にすぎないのかもしれない。しかし、その伝説の作用かどうかは分からないが、それまで何度か訪れていたジョホールバルの見慣れた景色が何か違って見える気がした。今から千年以上も前に日本から遠く離れたこの地で命を落とした高岳親王に思いを馳せながら、自然と墓に手を合わせた。  
[2017.12.26]

（のぶた・としひろ 国立民族学博物館）